紹介

『中世説話の研究』

菊地良一著

この本は中世説話—中でも特に扱い方のむずかしい「仏教説話」と「文学」とのかかわりあいを、仏教文学の立場で論述したもので、著者が長い間追求されて来られた成果を公にされた金字塔である。そしてまたある意味では今後における中世説話研究の一方向を示唆したものとも言えよう。

内容は、

第一部　中世仏教説話

第一仏教説話の教説と唱導。第二往生伝の教理と説話形成。第三仏教説話の世俗化。第四仏教説話の文学的形成。第五説話における夢について。第六『霊異記』「本有種子」と「新薫種子」

第二部　僧伝文芸における説話形成

第一古代僧伝の説話的形成。第二に説話系僧伝。第三古代僧伝の帰趨。第四中世僧伝の成立。第五喜海『栂尾明恵上人伝』。第六躭空『本朝祖師伝記絵詞』。第七覚如『本願寺聖人親鸞伝絵』。第八聖戒『一遍聖絵』

から成っている。

第一部は巻頭の序説でまず仏教説話の問題で「文学か否か」という議論の多い、根本の問題に対する著者の基本姿勢が述べられている。

すなわち著者は「文学」と「仏教」は本来異質なものであるが、「仏教の教義と信仰の弘通活動」という作業の中で、その目的達成の一つの方法として、たとえば法語・僧伝・寺誌縁起・歌讃・説話唱導等々の言語による活動があげられるが、これらの言語活動の中には必然的に「文学」が存在するという。そしてこうした言語活動の内容を「文学の立場」で考察するのが仏教文学の研究なのだと論述する。

そして「一言芳談」・「打聞集」・「正法眼蔵」・「正法眼蔵随聞記」等を取りあげ、その関連を指適されていいる。

第二部は古代僧から中世僧にいたる僧伝の成立についてふれ、古代僧伝は「大陸からの伝来活動や学解伝承、官朝における尊崇、造寺造仏、加持効験」など出家者の偉大さが説かれているのが特色であるが、平安朝後期以後においては行の実践が信仰であるという態度が見え、また浄土教の影響などから往生者の伝記がその主流をなしていると説く。たとえば「日本往生極楽記」・「本朝法華経験記」・「拾遺往生伝」などにそれが見えるという。

最後に「梅尾明恵上人伝」・「一遍聖絵」他等　の各伝記を紹介、解説している。

著者は本書を上梓される以前、昭和三十三年岩波講座日本文学史第四「中世仏教と中世文学」中の「唱導文芸」を担当され、また昭和四十三年には『中世唱導文芸』（塙選書）という一冊を世に送りさらにその他多くの論文を拝見してもわかるように、一貫して仏教文学に取り組んで来られた方でこの方面の先駆者の一人である。昭和十三年駒沢大学東洋学科卒業。

昭和四十七年四月　桜楓社刊　A5判・二七〇頁（三八〇〇円）